

## 第1講：はじめに

レポート課題：オリエントとは何か？

近代のオリエント像：オリエンタリズム

オリエントについての近代西洋人の画一的イメージ

バルフォアの下院での答弁（1910年）：エジプト支配の妥当性についての質問に対して（エドワード・サイード『オリエンタリズム』）

自分はオリエントの専門家・他の誰よりもオリエントについては知っている

官吏を派遣して支配するのは英国人の使命

オリエントを従属者と位置づける

オリエントにおける自治の欠如・ヨーロッパとは対照的

オリエントを支配することの正当性・オリエントが支配されることの正当性

古い偉大な文明・しかしその文明の頂点は先史時代に属する

専制と自由の欠如、市民社会の未成熟と権威主義、過去の偉大な文明と文化的後進性、伝統と非合理主義、社会の停滞など・・・劣格。

西洋人が最初に知ったアジア（古典的教養の世界）

旧約聖書：ペルシア王アハシュエロス・新バビロニア王ネブカドネザル（ナブー・クドゥリ・ウツル2世）など

ギリシア・ローマの古典（ヘロドトス・ディオドロスなど）：ペルシア王クセルクセスの柔弱と傲慢・デカダンス・アッシリア王サルダナパルの女装趣味と自己中心主義

対立と脅威のアジア（恐れを抱かせる世界）

ペルシア戦争

アレクサンドロス大王の遠征

アラブの進出

十字軍

オスマントルコとの対立（ウィーン包囲・レバントの海戦）

植民地化されるアジア（憐憫、優越感そして軽蔑の対象としての世界）

近代の経験

軍事的弱体化（露土戦争・セポイの乱・阿片戦争）

カピチュレーションによる関税自主権の喪失（トルコ）

工業製品の輸入と農場や鉱山、鉄道、港湾への投資（バグダッド鉄道・スエズ運河・インドなど）

西洋諸国の軍隊や官吏の駐屯（オラービー＝パシャの乱・エジプト、インド）

植民地省による統治（インド）

腐敗

非衛生

教養の欠如

貧困

迷信と非合理性

発展から取り残されたアジア（停滞した世界）

産業の後進性

女性の地位

民主主義と自由の未発達

過去の偉大な文明遺産と後進的な現代の文化水準

サイードが紹介する

英国人の公平性とエジプト人管理の腐敗

英国人の支配を受ける方が腐敗し墮落した自国民官吏の支配を受けるより幸せ

参考文献

エドワード・サイード（今沢紀子訳、板垣雄三・杉田英明監修）

『オリエンタリズム』 上・下、平凡社、1993年。